RAILWAY PHOTOGRAPHY & POETRY CONTEST 2019

鉄道写真詩コンテスト入賞作品集

写真と詩で伝える鉄道の魅力

国土交通省鉄道局長賞

JR北上線　ほっとゆだ・ゆだ錦秋湖間

「春の舞台」　辻本一夫（東京都）

辺り一面、静まり返った舞台では
夜明けとともに春の息吹が溢れだし
冬を耐えた山々が再び目を覚ます
やがて霞の緞帳が上がると
春の匂いを引き連れた
主役が颯爽と現れた

米屋こうじ賞

JR肥薩線　八代駅

「遠い夏」　櫻井路子（東京都）

遠い夏、ボクらはいつも
電車に揺られていた。
語り明かした頑な理想が
長い旅をどこまでも照らし、
線路は希望へとつながっていた。
真新しい紺色のスーツに袖を通す頃、
ボクたちの旅は終わった。
今は、列車の揺れが
遠い遠い夏を照らす。
ふと降り立った駅に
あの頃のボクらがいた。

鉄道写真詩とは

鉄道写真詩とは、「鉄道写真」に「詩」を組み合わせて鉄道の持つ魅力を表現するものです。
普段乗り慣れた鉄道、旅先での鉄道、その時々出会った鉄道の表情とともに作者の心情が伝わってきます。

Japan Network for Sustainable Transport and Environment
一般社団法人交通環境整備ネットワーク "ecotran"

入選

ゆいレール　旭橋・壺川間

中村高士　（沖縄県）

「夕焼けの向こうに」

夕焼けの向こうに
新しい一日が待っている
列車は走る
今日の終わりを追いかけて
列車は走る
明日の始まりを待ちわびて
列車は走る
カタタンカタタン
夕焼け色の線路を走る

入選

会津鉄道 養鱒公園駅

岡本由紀　（東京都）

「下を向いて」

下を向いて泣いてごらん。
大きな大きな湖ができるまで
泣いてごらん。
いつもは通り過ぎてしまう人たちが、
桜色の掌（てのひら）を
差し伸べてくれるから。
下を向いて泣いてごらん。
枯れ果てるまで泣いてごらん。
涙が尽きたその瞬間、
水面に何かが映し出されているから。

入選

南海鋼索線　極楽橋駅

志波英明　（東京都）

「千歳の山径」

晩夏の風が露を消し
龍王の幻影に共鳴す
西の波風聞ゆる夕に
発着表に旅装行き交い
朱の欄干を遠望す
陰る坂道の改札に
蒼の灯火を身に宿し
唐車人を三山に誘う
鋼索に這う笹のさざめきに
頂の円窓に伽藍煙り
砂利道に立つ人を迎える
一里塚に咲く高野箒に

講　評

◇　米屋こうじ　Yoneya Koji
鉄道写真家

鉄道写真詩コンテストで、ジャッジの基準としているのは「詩が写真の説明になっていない」ことです。文章が単なる絵解きであっては、せっかくの写真も詩も作品として輝きを放てません。

第3回の今回は、そんな基準ラインをクリアしている作品が割合として高くなったと感じました。さらには、写真のレベルが向上しており、審査にも力が入りました。

そんななか、私が選んだのは櫻井路子さんの「遠い夏」。映り込みを生かした写真で、作者独自のカメラ目線があります。ポスターの東北と撮影地の九州が18きっぷを介して繋がっている……。という裏テーマの存在さえ感じられます。過去に時間軸を置いた詩も、作品の世界をより広げています。

◇　水無田気流　Minashita Kiriu
詩人・社会学者

鉄道は撮る、乗る、聴く……等、さまざまな楽しみ方ができますが、写真詩は言葉を詠み込む「詠み鉄」と読んでおります。今年も、多くの詠み鉄のみなさまの作品をお送りいただき、誠にありがとうございました。回を重ねるごとに、みなさまの表現が洗練されてきたように思います。

今回私が選出させていただいた木村太郎さんの「語る」は、博物館にある機関車という、生活空間から切り離された対象に、その歩んできた時間や経験を投影した内容です。初連は疑問詞の連続で緊張感をもたせ、二連の体言止めが韻律の歯切れを良くし、終連末尾で脚韻を揃えるといった技法により、写真を重厚に「語る」ことに成功している作品だと思います。

写真は情報量が多いので、言葉は若干引き算の感覚でつけた方がしっくりくる場合が多いのですが、もう一歩進めるならば、単に言葉を刈り込むというよりも、韻律を整えたり、暗喩や換喩表現などを駆使して「積極的に言葉数を減らし、その分美的な表現の重厚さを増す」ことを目指すのも良いでしょう。

水無田気流賞

京都鉄道博物館　扇形車庫

「語る」　木村太郎（滋賀県）

誰が乗客か
何が積荷か
それさえ知らず、気にかけず
ただ、命ぜられるまま走る
その為に生まれた鉄の馬

新たな駿馬に敗北したその日
たぎる炎を失った
轟くいななき、熱い吐息
全ては過去の記憶へ

今、ここで眠っているのか
それとも、死んでいるのか
否
今ここで生きている
無音で語り続ける
勾配、橋梁、隧道、駅
自らの見た景色を語り続ける

エコトラン賞

津軽鉄道　五所川原駅

「冬の夜のシャボン玉」　水野　誠（福島県）

北の夜に降る大粒の雪に光が当たると
まるで、シャボン玉。
指先で弾いたら、
コンコンと音を出してくれないかな。
たくさん、たくさん雪が降って、
シャボン玉がコンコン、コンコンって
綺麗な音色を賑やかに出してくれないかな。
静かな雪の夜が、いっぺんに賑やかなる。
そんな場面に出会えないかな・・。

国土交通省鉄道局後援　　一般社団法人交通環境整備ネットワーク主催
鉄道写真詩コンテスト2019　－写真と詩で伝える鉄道の魅力－
協力：鉄道博物館・東武博物館・日本現代詩歌文学館・東北福祉大学 鉄道交流ステーション
協賛：JTB・すすすクラブツーリズム・旅の手帖・交通新聞社・関東交通印刷

鉄道×文学の新しい表現に挑戦！　あなたの撮った鉄道写真にあなたの詩を添えて

「鉄道写真詩」は、「鉄道写真」に「詩」を組み合わせて鉄道の魅力やその旅情を表現する新たな芸術活動です。
本コンテストは、その登竜門としての役割を担うもので2017年に第1回を開催し、本年で3回目となります。作品は2019年7月1日から9月30日の間、ホームページの応募フォームより受付を行いました。
多数のご応募をいただき、ありがとうございました。
本コンテストの作品及び過去の受賞作品は、ホームページでご覧いただけます。

https://ecotran.or.jp/photo/2019

入選
大場正明（宮城県）

「ホーム」

帰りを急ぐ人
すれ違う列車

曖昧な記憶の中
ホームに立つあの日の自分がいる

今となっては思い出せない
誰を見送っていたのか
誰を待っていたのか

ただひとつだけ思い出せるのは
優しい時間が流れていた事だけ

東北新幹線 仙台駅

入選
玉村雅美（東京都）

「君と一緒に……」

君と一緒にこの街の駅で汽笛を聞こう！
二人で手をつないで、ずっと聞きたい。
何も考えずに、君と汽車を見つめる僕。
そして君も僕と汽車を見つめてくれる。
ただそれだけでいいんだ……。
夢の中で、その汽車は僕にこう言った。
「〝その時〟がくるまで私は生きている」

JR室蘭本線　追分駅

入選
土田　恒（神奈川県）

「あお」

みつけた
私の大好きな色
どこまでも
どこまでも
東のはての
あの島まで
つづいているのだろうか

JR花咲線　落石駅

入選
栗原正隆（大阪府）

「空蝉」

遠い夏の日の思い出を探し続けて
また暑い季節が巡り来る
記憶の中に取り残された
何かを辿ってはみるが
たどり着かない　たどり着けない
遠き日の残像
封じ込めた怖い体験か
本能が避けているだろうが
確かに残っている　確かに存在する
遠き日の残像
空っぽになれば楽だけど
深い深い記憶の奥でこびりつき
しがみついてる　空蝉のように

近鉄南大阪線　土師ノ里・藤井寺間

入選
鎌倉　和（静岡県）

「待ち人来たる」

今から　帰って来る　君と
僕は　何して　遊ぼうか
今から　帰って来る　君に
僕は　何を　話そうか
今から　帰って来る　君は
僕に　何を　話すだろう
まだまだ見えない
あの電車
僕はずうっと見つめてた
まだまだ見えない
あの姿
私はずうっと見つめてた

JR飯田線　向市場